

源氏物語終末の救済について

重 松 信 弘

源氏物語終末の救済の問題とは、直接的には浮舟一人の問題であるが、それは同時に、源氏物語全体の人間救済の問題とも関連している。浮舟のことが特に問題となるのは、浮舟を出家させた横川の僧都が、浮舟に還俗を勧め、それまで出家の境に安住していた浮舟の心を乱したため、浮舟が還俗する気になったのか、しない気であるのか、それとも途方に暮れているのか、その心はつきりしないためである。また僧都が還俗を勧めた手紙の文意にも、明確でない点があつて、僧都は還俗を勧めたのではないという説も生じて、問題を一層複雑にしている。このような朦朧たるさまで物語の幕を閉じることは、文法的には甚だ趣の深いことであるが、救済問題の立場からは、いろいろな論議を生ぜしめることとなる。まず問題の生ずる物語の要点を検討し、次に救済問題を考察する。

浮舟は匂宮と通じたことの罪を思つて、宇治川に入水を企てて、遂げられず、正気をなくして某院に倒れている所を、横川の僧都やその妹尼などに助けられて、小野に伴われる。僧都は山に帰るが、浮舟が快方に向かわないので、妹尼の懇請により、わざわざ下山し、加持して物の怪を退散さす。正氣づいた浮舟は、「尼になし給

ひてよ。さてのみなむ、生くるやうもあるべき」(手習・以下同)と頼むが、妹尼は浮舟を亡くなった娘の再生として可愛がり、出家をとめて、五戒だけを受けさせる。僧都も(1)「今はかばかりにて、いたはり(病氣を)やめ奉り給へ」といつて山へ帰る。その後も浮舟の出家の思ひは変わらず、妹尼は「例の人にてはあらじと、いとうたであるまで世を恨み待るめれば……世をこめたる盛りにては、つひにいかがとなむ、見給へ待る」と心配する。浮舟自身は「限りなく愛き身なりけりと見果ててし命さへ、あさましう長くて、いかなるさまにさすらふべきならむ。ひたぶるに無きものと、人に見聞き捨てられてもやみなばや」と思う。罪に対する深い自覚から、わが世を捨てて、償わうとする心である。また妹尼の亡くなった娘の婿の中將に、懸想の心が見えるので、「なほかかる筋のこと、人にも思ひ放たすべきさま(尼)に、疾くなし給ひてよとて、経習ひ読み給ふ心のうちにしも、(仏を)念じ給ふ」という。

妹尼が出家をさせないので、その長谷寺詣での留守に、僧都が立寄つたのを幸として、尼にしてくれと懇願する。僧都は(2)「まだい」と行先き遠げなる御ほどに、いかでかはひたみちに、しかは思し立たむ。却りて罪あることなり。思ひ立ちて心^{おぼ}を起し給ふ程は、強く思せど、年月経れば、女の御身といふもの、いと怠々しきもの」と

いって、承諾しない。浮舟は親なども尼にしようといっていたのであり、自分も「後の世をだにと思ふ心深く侍りしを、亡くなるべき程のやうやう近くなり侍るにや、心地のいと弱くのみなり侍るを」と泣きながら訴える。そこで僧都も初めて、(3)「とまれかくまれ思し立ちて宣ふを、三宝のいとかしこくほめ給ふことなり。法師にて聞え返すべきことにあらず」といって、承諾するが、今日は一品宮の御修法のため出京するのだから、七日して帰る時といつて、日を延ばす。浮舟としては、七日経てば妹尼が帰り、出家できなくなると思い、口惜しくて、特に気分がひどく悪いさまをして、「いと苦しく侍れば、重くならば、忌むこと(出家すること)かひなくや侍らむ。なほ今日は嬉しき折とこそ、思ひ侍れとて、いみじく泣き給へば」僧都も(4)「いとほしく思ひて」ついに出家さす。浮舟を出家さすに当って、僧都はかなり用心深い態度をとっている。最初出家を望んだ時、(1)では軽くないし、(2)でも若い女の出家は危険だとして止める。(3)で漸く許すというが、それでもなお七日後という。(4)で浮舟がひどく泣いて訴えるので、あわれになってやっと出家さす。慎重な態度であるといえるが、それでもこの後、還俗を勧めることになるので、僧都を軽卒とする批判も出る。この後の還俗の勧奨は、薫との関係が分つたためであるが、この時立入って、そのような浮舟身辺の事情を穿鑿することは、僧として憚られることであり、浮舟としても決して話さないであろうから、この上事情を質すべきであったというのは、いささか僧都に対して酷であろう。ただ浮舟の情にほだされた嫌いはあるが、これはこの僧都が僧侶の中でも、最も人間味豊かな人として造型されており、ここで出

源氏物語終末の救済について

家させたのは、僧都の人柄による所もあるであろう。宇治の阿闍梨なら、或いは出家させなかつたかも知れない。

浮舟は今まで願つてもとげられなかつたことが、実現したので、「嬉しくもしつるかな」と喜び、仏に感謝する。そして「ただ今は心安く嬉し。世に経べきものは、思ひかけずなりぬることは、いとめでたきことなれ、と胸のあきたる心地」がする。

無きものと身をも人も思ひつつ捨ててし世をぞ更に捨てつる限りとぞ思ひなりにし世の中を返す返すも背きぬるかも。

岸遠くこぞ離るらむあま舟にのりおくれじといそがるるかな

などと、その心境を詠んで、出家したことの深い感慨と、目的を達し得た心の落付きとを表している。妹尼は長谷寺詣でから帰って驚き、臥しまろんで悲しむが、何とも致方がないと諦める。浮舟は「思ひもよらず、あさましきこともありし身なれば、いとうとまし。すべて朽木などのやうにて、人に見捨てられてやみなむ」と思う。今までは日頃結ばはれて、物思いをしていたが、「この本意の事し給ひてのちより、少し晴れ晴れしくなりて、尼君とはかなくたはぶれもしかはし、甚打ちなどしてぞ、明かし暮し給ふ。行ひもいとよくして、法華経は更なり、他法文などもいと多く読み給ふ」というようになる。すっかり生れ変わったさまであるが、それは重い罪を犯したこの世を捨てたので、この世の厭わしさから解放されたためである。もとより後世の往生は望むが、その思ひが主動的にはたらいだ出家ではない。厭離穢土の思ひが先行し、欣求浄土の思ひは消極的にそれに従って、厭離の思いを安定させている。浄土は安住境であつても、その願いに促がされて出家したのではなく、罪業

厭世の重庄に堪えかねて、現世を逃避して出家したのである。但し動機は逃避であつても、出家後はひたすら往生の道に心を傾けており、その心は救われているさまである。

浮舟のせつかく安定した心を乱したのは、僧都の還俗のすすめである。僧都が一品宮の修法の後で、明石中宮にこの出家させた女のことを話したのが、廻つて薫に伝わり、薫は事の真相が知りたくて、横川に僧都を訪ねる。薫が浮舟のことを質すと、僧都は浮舟が薫の愛人であつたと知つて、大いに驚く。「法師といひながら、心もなく、忽にかたちをやつしけること、と胸つぶれ」（夢浮橋・以下同）、また薫のさまを見ては「かく思しけることを、この世にはなき人と同じやうになしたること、とあやまちしたる心地」がして、罪深く思う。また薫のさまをみるにつけ、「髪髭をそりたる法師だに、怪しき心は失せぬものなり。まして女の御身といふものは、いかがあらむ。いとほしう罪得ぬべきわざにもあるかな」と、浮舟に対しても、罪なことをしたと思う。薫に愛情があるので、浮舟にもあるものと思ひ、浮舟を出家させたことは、薫の愛情を妨げると共に、浮舟の愛情も妨げたことになるとして、二人に対して罪なことをしたと思うのである。それでも薫が小野へ案内してくれと頼むと、「なにがしこのしるべにて、必ず罪得侍りなむ」といつて断り、さすがに、仏者の面目を表している。薫は浮いた心ではなく、母親が歎いているから、会いたいというので、浮舟あての手紙を書く。手紙では、薫から精しく事情を聞いたとして、

御志深かりける御中を背き給ひて、あやしき山賤やまがたの中に、出家し給へること、却りては仏の責め添ふべきことなるをなむ、承り驚

き侍る。いかがはせむ。もとの御契りあやまち給はで、愛執の罪を晴るかし聞え給ひて、一日の出家の功德は量りなきものなれば、なほ頼ませ給へとなむ。云々。

という。この手紙に関して、種々の問題が出ている。「もとの御契りあやまち給はで、云々」の解釈についても、(一)註釈書はたいてい、薫の愛執の罪を消すため、浮舟に還俗を勧めたものとするが、愛執の罪を浮舟のものとみる説もある。また近時(二)僧都は還俗をすすめたのではないという説も出ている。還俗説でも(三)それを勧めたのは僧都も軽卒であるが、それよりも浮舟が無思慮軽卒であるとする説と、浮舟は純粹真摯であるとする説とがある。更に四僧都が還俗を勧めたのは、浮舟救済の最善の道だとする説と、(四)僧都の思惟は透徹せず、解決に困惑して、物のあわれに負けたのだとする説とがある。以下これらの説を検討しながら、浮舟救済の問題を考察する。

二

(一)註釈書では、岷江入楚が「箋」(三条西実枝の説)として、「此ままにては、薫の愛執はなるべからず。もとの如くの契になり、愛執の罪をはらせとなり」とし、湖月抄もこれを承け、近時の諸書も大体同じ意味に解している。即ち薫とのかつて夫婦であつた因縁を損わないで、もとの関係に戻り、薫の愛執の罪を消してから(一日でも出家した功德は無量であるから)その後で、仏の救いを頼みなさいという意味に解している。僧都は薫に、浮舟に対する愛執があるとみており、「晴るかし聞え給ひて」の敬語も、薫に対す

るものと思われるが、そうすると、浮舟は薫の愛執を晴らす手段に使われることとなり、浮舟の人格を全く無視することになる。当時の貴族社会には、女を男の犠牲にしてもよいという思想が、もしあったとしても、仏教の立場では、そのようなことはないはずである。また愛執を浮舟のものとする説もあるが、それでは現に愛執のあることを知らされた薫をさしおいて、浮舟のそれを晴らすというもおかしく、また文章の敬語からも、妥当とはしがたい。思うに愛情は相対的であり、僧都は薫に愛情のあることを知って、浮舟にもあると思つたのである。前の「まして女の御身といふものは、いかがあらむ。いとほしう罪得ぬべきわざにもあるかな」は、それを表す。手紙の文意は筋としては、薫の愛執をいうが、愛執は浮舟にもあると思つているから、その罪を晴らすことは、同時に浮舟のそれを晴らす意味も含むことになる。また女に対して、直接自分の愛執を晴らすため、還俗しなさいというのも、無算であつて、いうべきことでもないから、かたがた薫のこととして、浮舟のことを含むとみるべきであろう。このように解することによつて、浮舟を薫の手段にするという批判は、なくなるであろう。

(二) 非還俗説の主要なものとして、僧都ほどの人が、還俗のような罪深いことを勧めるはずはないという多屋頼俊氏の説と、本文の解釈から、非還俗と解すべきだとする門前眞一氏の説とが注目される。多屋氏によると、尊い出家の道を廢棄せしめると、その当人も廢棄させた人も、共に無量の罪に当る。一日の出家の功德は無量であるが、浮舟は出家して九ヶ月になるから、この辺で破戒しても大丈夫だというような、低級愚劣なことを、学徳兼備の横川僧都にさ

せるはずがない。「もとの御契りあやまち給はで」とは、もと夫婦であつた因縁を捨てないで、その因縁に従つてという意味だとする。門前氏は「もとの御契り」とは、僧都が浮舟を出家させた宿世の縁を指すとし、僧都は浮舟に対して、出家したことを續けて、清い生活を送り、薫を感化して、その愛執の罪を晴らすようにするのであり、還俗説には浮舟を薫の手段に利用している感じがあるという。

多屋氏の説は、仏教思想と横川の僧都観が先行して、本文の意味を厳正に吟味して、また源氏物語の思想を広く考えて、論を立てているものとはしがたい。また夫婦であつた因縁に従つて、何をせよというのか、不明である。門前氏が「もとの御契り」を、僧都が浮舟を出家させた宿縁とみるのは新見であるが、これにも難点があるように思う。源氏物語に宿世の意味の「契り」の用例は、約百十あり、その大部分は男女関係を指し、「親子兄弟仲なども多少ある。他人の仲に用いられているのは、数例しかなく、それもすべて宿縁だろうと推測して思っているだけで、「もとの御契りあやまち給はで」というように、確定的にいうものはいつもない。また薫との夫婦関係は現在絶たれているから、「もとの御契り」という「もとの」が、極めて適切であるが、出家させたことを宿縁とすると、その出家は現在も続いているから、「もとの」ということが適切でない。「もとの御契り」は薫との仲を指すとみる方が、僧都との関係とみるよりも、妥当である。なお門前氏は多屋氏が説かなかつた愛執の罪を晴らす方法を説いている。しかし浮舟に出家修行を立派にして、薫の愛執の罪を消すことを求めるのは、無理であり、僧

部がこれを浮舟に求めるとも思えない。大君は浮舟よりも、はるかに勝れた人間に描かれているが、出家して、薫と法の友として交わろうと思ったことはあつても、薫を感化して、自分に対する愛執を晴らそうなどという、大それたことは考えていない。大君よりは人柄・知性・教養・種性などの劣る浮舟に、そのような重荷を負わすことは考えられず、またそれが可能であるとも思えない。かたがた、非還俗説には、無理があるように思う。

(三) 僧都が浮舟を出家させておいて、一年にもならないで還俗をゆるめるのは、明らかに矛盾であり、出家させたことは、軽卒であり、失敗であつたことになる。薫の來訪をうけて、心が動揺しているが、これにはこの失敗の思いと、薫という貴顕に対する恐縮の思いとが、混合しているであらう。即ち浮舟のことを問われて、胸がつぶれる思いがしたり、過を犯した心地がしたりするのは、失敗であつたという思いが、薫を憚る心と共に、起つていることを表す。失敗の思いとは、薫と浮舟との愛執を妨げて、罪を作ったことをしたという思いであり、この失敗を償う道として、還俗を考えたが、出家は浮舟の懇願を容れたため生じたことであるから、浮舟の方に、むしろ重い責任がある。出家させた時、僧都は事情を知らず、薫の中を知ると、浮舟の独断の出家は許されぬことと思ひ、「御志深かりける御中を背かせ給ひて、あやしき山賤の中に出家したまへること、却りて仏の責め添ふべきこと」と、浮舟を咎めて、還俗を勧める。浮舟を出家させたことは、僧都自身も軽卒であつたと思うが、浮舟にもその責めがあるとしてゐる。

僧都の立場の考え方はそれでよいが、浮舟の立場からみて、その

出家は軽卒過誤といえるであらうか。丸山キヨ子氏は浮舟の出家を軽卒とみ、小野村洋子氏は純粹真摯とみている。丸山氏は浮舟のつた失跡・入水・出家という道は、深刻なようで浅く、育ちの賤しさからくる無思慮・軽薄なやり方である。それも薫が不誠実ならともかく、立派な夫であるのに、独断で出家したのは、身勝手であり、軽卒であり、潜越である。しかし出家は浮舟の止むに止まれぬ切願であるから、僧都の還俗の勧めを受入れる心には、なつていないともいふ。小野村氏は浮舟の愛の高揚・苦惱・出家という道程は、育ちの賤しいための無思慮・軽卒というような、日常的場面であらうといふ。あまりに輝き、純粹であり、真摯であり、深刻であるといふ。

一般的にいって、或る事に当而した時点では、いかに純粹真摯な心で行つたとしても、その本人が後で、(一) 軽卒とも過誤とも思うことがあり、反対に、(二) その思いのないこともあるであらう。また他人からみて(或いは当時の社会道德に照らして)、(三) 軽卒過誤と思われることもあるが、(四) 思われぬこともあるであらう。純粹真摯といふのは、主観的なことであり、それがその時代その社会の客観的規準に合うとは限らない。それで後から本人が客観的に(社会道德上から) 考へて、また他人が考へて、それを軽卒過誤と思うことはあり得る。僧都は浮舟が出家を願つた時、純粹真摯であるとは思つたが、薫が出現して事情が分ると、浮舟は軽卒で過誤を犯したものの、即ち(三)の思いがして、還俗を勧めたのである。丸山氏は僧都のような立場で、浮舟をみ、僧都が咎めたように、浮舟を咎めてゐる。それと共に、浮舟自身も、(一) のような心でゐるといふ。即ち独

断の出家が軽卒であることは、浮舟の反省において自覚されており、薫に会うことをはしたなく思うのは、それを示すという。しかし、薫の選俗の勧めを受入れる心になっていないともいいますが、それならば浮舟は、必ずしも(一)の思いに徹しておらず、(二)の思いを持つことになるであろう。その点多少釈然としないが、氏はなおこれらのことは、別に考えるという。

思うに浮舟の出家は、いわば非常手段であり、薫に対する地上の義理を欠くことは、勿論承知の上のことである。薫に会うことをはしたなく思うのは、この義理に背く思いの外に、当時の女性として、尼姿をみられることのはじらいの心があるであろう。はしたなく思うからといって、それが出家を軽卒と想って、後悔していることを意味するとはいえない。地上の道徳に背くことは、十分知っていても、なおそれを破って、押して出家せざるを得ない切なる心情があり、小野村氏はそれを指摘している。浮舟にとって、出家は喜ぶべきことであって、軽卒でも過誤でもない。それと共に、僧都が(三)のような立場で、浮舟を咎めるのも、無理のないことである。この食違ひは、浮舟の出家の原因が薫ではなくて、匂宮にあることを、僧都が知らないことから起っている。浮舟としても、それは打明けられないことであり、二人の立場を無理のないようにして、食違ひを生ぜしめて、感興を深くしている。

三

四横川の僧都は薫の来訪にあつて、心が動揺し、浮舟への手紙の中で、浮舟の出家は仏の責めが添うべきことで「承り驚き侍る」と

いひ、薫が頼みもしないのに、その心を推測して選俗を勧めめるのは、薫の心を憚り、その意に添わうとする心があるためであろう。当時宮中に入出し、貴族と交る貴族僧としては、これくらいのことでは普通であり、作者は僧都が、特に薫に迎合しているという意味で、これらのことを描いたのではない。しかし一般の世人が、このような問題で僧都に会ったとしても、僧都はこれほど狼狽したり、恐縮したりはしないであろうから、無意識の中に、薫に迎合しているといえる。但しこれは当時の貴族と交わる僧侶としては、一般的なことであつて、ひとり僧都だけのことではなく、迎合ということとは、僧都の意識にはない。従つて選俗の勧めも、意識的に迎合を思つたことではないが、浮舟の心を質さないで、浮舟にも愛執があるものと思つたのは、速断に過ぎ、結果的には、薫のためだけを圖つて、浮舟を思わないこととなつている。

丸山氏は、僧都が浮舟を出家させたのは、自分も浮舟も軽卒であつたとし、浮舟を選俗させて、薫の愛執にかかわつて、往生を妨げるような立場から、解放さそうとしたもので、選俗は罪深いことのようにあつても、実は愛執に処して、愛執を超える道であるという。そして出家も選俗も一貫して、浮舟を救わうとする仏者の慈心によるもので、僧都の態度に矛盾はない。実に僧都は「仏教的真理、仏の教に徹する事においては、常識を遙かに超えた深きを持ち、そしてまた個々の場に依りては、自在に判断することの出来る『信』故の自由を持った最もすぐれた姿」であるという。この物語には、この世のほだしがなくなつてから、出家するのがよいとする思想があるので、浮舟は選俗して、愛執を滅尽した後で出家するの

が、往生を確かにする道であると考えられる。僧都はこの考え方で、浮舟に還俗を勧めたのであり、還俗は仏の道に背くようではあるが、長い目でみれば、眞の救済の道であるといえる。僧都が僧侶でありながら還俗を考えて、長い将来での救済に望みを託したのは、思い切ったことであり、丸山氏はこのため、僧都のたった処置を、大いに称えたのである。

僧都の還俗の勧めが、思い切った果敢な考え方であるとしても、それが浮舟に受入れられず、却って浮舟を悩ます結果となったことは、何と解すべきであろうか。還俗の勧めは、薫に会って、浮舟にも愛執があると判断したためであるが、浮舟が出家の心境に安住していることは、知っていたはずである。薫に会って、急に浮舟にも愛執があると思つたのは、早く気を廻しすぎた誤断である。もっとも浮舟に匂宮のことのあるのは知らず、また世俗の情事にうとい出家の身であるから、止むを得ないともいえるが、切角の果敢な救済策が、肝心の浮舟に入れられないとすれば、それは救済策としては無用である。この失敗は浮舟の心を知らないために起つたのであるが、浮舟の出家に慎重であつた僧都であるから、還俗という重大事を提出するためには、浮舟の心境を質すくらい慎重さがあつてもよいと思う。僧都の浮舟誤断には、十分同情すべき理由はあるにしても、早く気を廻しすぎた軽率さによることも、否めないであろう。僧都の主観に注目すれば、還俗の勧めは賞讃すべきことであろうが、浮舟を救う現実の方策としては、無意味ともいえる。但しこれを文芸的効果の点からみるのは、別問題であり、その立場からみだ意義は、高く評価されるであろう。

(四) 還俗は世俗人に返ることであるが、世俗に返るだけでは、救済の保証がないともいえる。小野村氏はこの点を追求して、僧都の還俗の勧めには、救済の道が示されてないとする。即ち還俗して愛執の罪、還俗の罪を犯しても、なほ救済の希望をかける論理があればよいが、僧都の手紙はその点が明確でなく、矛盾を克服する機制がないという。そしてそのことは、作者も知っており、それは浮舟の態度に現れている。浮舟が薫の消息を受取る態度が、源氏物語究極の態度であるが、浮舟は僧都さえ解決できない難問題を、解決する力はない。これは作者が思惟の壁にぶつかり、構想の限界に達したためであろう。「かくて人間のあはれの世界の攻勢の前に、一枚の几帖を楯として、なすべき方途もなくうち臥す浮舟の姿をもつて、源氏物語は終る」という。

横川の僧都の手紙では、「一日の出家の功德」の無量であることという外には、救済に対する何の力も説いてはいない。この「一日の出家の功德」も、還俗した世俗人の救済を保証するほど、力の強いものとも思われない。また薫については、何もいっていない。これらの点からみて、僧都は救済の道を明かにしていないといえるし、更に僧都には、浮舟救済問題の解決案がないという考え方も起り得る。しかしこの物語には、前にも述べたように、晩年になり、現世に対する執着がなくなつてから、出家する事例が甚だ多い。作者は物語の主人公源氏に、その道を探らしており、その他、朝顔斎院・朧月夜尚侍・源内侍・弁の尼などはその例であり、紫上もそれを熱望し、現実的な明石上・玉鬘さえも、出家を思っている。但しそれは心ある人のことであり、専ら現実的で、後世に心のない人

は、出家したり、出家を思ったりしない。頭中将・夕霧・匂宮・末摘花・花散里などはそれである。いわゆる心ある人は、たいてい出家に心を傾けているので、その事例からみて、浮舟が還俗したとしても、既に一度出家したこともあり、その晩年愛執がなくなつてから、出家するということは、十分期待される。還俗は一応は、浮舟を救済の約束のない愛欲の世界に、放り出すような形ではあるが、この物語に流れている出離の思想からみて、浮舟には救済の手が、ひそかに用意されているとみてよい。このことは薫についてもいえる。薫は早くから道心を懐いて、出離を思っており、この物語の中で、最も仏道に心の深い人として造型されている。出離の素志のあることは、僧にも語っており、晩年にほだしがなくなつてから、出家する可能性の最も多い人である。以上のように考えると、還俗は浮舟や薫を、救いの望みのない業苦の世界に、導くものともいえない。もし浮舟に愛執があるとすれば、還俗こそが、救済の門に入る道であるといつてもよい。要するに愛執をなくすることは（広い意味でいえば、この世のほだしをなくすることは）、物語にみられる有力な出家への動因であり、僧はその道を浮舟に勧めたのである。僧都の手紙には書いてなくても、僧都が期待している救いの道は、この物語に流れている思想から、十分推測され、用意されているといつてよい。

また僧都が解決できない難問題を、浮舟に解決する力はなく、浮舟が几帳の蔭に、「なすべき方途もなく、打臥す姿」が、源氏物語究極の態度であるとするならば、それは浮舟が、いかにして救われるべきか、その道が分らなくなつただけでなく、源氏物語も行詰りを

源氏物語終末の救済について

きたして、幕を閉じたことになる。しかし浮舟が物語終末の場で、涙を流して困惑しているさまに描いてあるからといって、そのあわれの底に、浮舟の堅い心が潜んでいることを見落してはならない。薫の手紙を「所たがへにもあらむに、いとかたはら痛かるべし」などと、しらばくれたことをいい、また小君をすげなくあしらつて、妹尼がもてあますほど頑しいさまを示すのも、あわれの情の底に潜む堅い決意が、おのずから頭をもたげたものとみられる。今までに(1)「ひたぶるに無きものと、人に見聞き捨てられてもやみなばや」とも、(2)「あさましきこともありし身なれば、いとうとまし。すべて朽木などのやうにて、人に見捨てられてもやみなむ」とも思う心が、幾回となく繰返されており、出家への決意も極めて強く、かつ執拗であつたこと、また出家した後それを深く喜び、心が落付いていることを思い、更に終末の場での非情なまでの頑しさを思えば、浮舟の志操心境はおのずから描かれている。もしその心境の動揺を思わすものがあるとすれば、終末の場だけであるが、この場においても、自己の志操を堅持する徴証がある。涙を流し、困惑するさまであるのは、その心境がぐらつて、自分の探るべき道に迷つたためではない。僧都の文、薫の消息、小君の米訪と、思ひもよらないことが、相次いで起つて、驚きと、困惑と、感慨の心を深くすると共に、前の(1)(2)のような素志が危殆に頻する恐れが生じて、心を傷めたためである。特に今まで唯一の出家の理解者であつた僧都に背かれ、自分の心を理解してくる者は一人もなく、身近い愛護者である妹尼達も、僧都や薫の側にあり、全くの孤立無援の窮境に立たされたのであるから、この場で涙が流れ、途方に暮れる思

いがするのは当然である。この場での諸条件によってかもし出された一時的な情緒と、心の底深く潜んでいる決意とは、別の位置にあり、前者で後者が損われたとは思われない。

四

以上のように考えると、僧都が浮舟救済の道に困惑しているとも、浮舟が自分の道に迷っているともいえない。従って、作者が思惟の壁にぶつかつたともいえず、その意味で、源氏物語の最後の世界が悲劇的世界であるともいえない。思想的に行詰つたという意味で、悲劇的とはいえないにしても、終末の場に悲壮なあわれともいふべき情緒は、ただよっている。それは主として、浮舟の心情の反映である。浮舟のせつかく罪の償いに生きようとする悲壮な決意を、恩義ある人々が妨げることになり、その決意を守る孤立の痛ましい姿が、悲壮な情調を造り出したのである。それと共に僧都の勧め、薫の呼びかけ、浮舟の志操がからみ合つて、一人浮舟が心を傷めながら、浮舟としては（当時の女性のならわしとして）自分の心をはつきりした形で表明すべきでないから、変らぬ決意を僅かに、前に述べた頑しきとして、柔軟優婉な弱々しい態度で、表すにすぎない。それが不安憂愁の情調を生み出し、何となく暗れやらぬ悲しさともいふべき気分を漂わしている。それは浮舟の決意が——反撥抵抗の心が——内部にこもる力として潜在し、外部に対する強い力として表現できないためである。終末の場の悲壮・憂愁・不安の情調は、浮舟の困惑傷心の姿の表れであり、それは浮舟の心境と周囲の人達との考え方の食違ひから生じたもので、この物語

の終末を飾る物のあわれである。このあわれを作り出したのは、浮舟の心を傷めた薫であり、横川の僧都である。浮舟を救済すべき立場の僧都が、還俗を勧めた浮舟を悩ますこととなつたのは、多少僧都の軽卒さによる所がないとはいえないが、浮舟に対する始めからの僧都の慈心は、その軽卒さを咎めさせない徳となつている。僧都としては、浮舟に常人に絶する秘密があるとは知らず、ただ薫との仲違いとだけ思い、常人への道理を以て、救済を考えた。僧都にこの判断の誤りを犯さした原因は、浮舟が作つており、浮舟はそれ自分が苦しみこととなつたのであり、微妙な構想である。要するに、物語終末の悲劇的性格は、この物語の救済思想の行詰りによるのではなく、人々の心の食違ひによるのである。

源氏物語の出家の様態を大きく分けると、二種の型となる。その一は、源氏が採つた道で、この世に執着がなくなつてから、出家する道である。これは前に述べたように、多くの人々が採つており、最も抵抗の少ない安易な道でもある。その二は、執着がなくなるのを待たないで、意志的に出家する道である。藤壺・女三宮・浮舟のような密通者が、その困却から逃れて出家する場合があり、朱雀院のように、また紫上が希望したように、病氣治癒を願つての出家もあり、明石入道や空蟬のように、身の不遇を歎いての出家もある。即ち出家には、おのずからこの世の執着がなくなるのを待つるものと、執着を意志的に絶つてするものがある。前者は他力の浄土門に近くて、易行道であり、後者は自力の聖道門に近くて、難行道である。正篇では源氏に、易行道的な出家を準備させて、暮を閉じ、宇治十帖では、従つて源氏物語全体としては、僧都には易行道

的な出家の道を説かせ、浮舟には聖道門的な出家に固執させたまま
で、暮を閉じている。終末の場では、僧都の浄土門的な救済の考え
方と、浮舟の聖道門的な出家に生きる心との食違いが出ているが、
それは教理の矛盾でも、救済の道の矛盾でもない。救済の門は二つ
あるが、そのいずれがよいかは、人により事情による。浮舟の場
合、僧都が易行道がよいと考えたのは、真実を知らないためである
から、浮舟の心の真実に立つ限り、浮舟の探るべき道は、おのずか
ら決定しているといえる。救済を求める人の決意心情が、根本とな
って、いずれかの道を選ぶべきこととなる。

浮舟が聖道門的な出家の道に固執していることが、この物語終末
の場で明確には描かれず、却って動揺困惑のさまに描かれているの
は、文芸として当然の表現技法であるが、このため種々の見解が生
じた。思想の追求は、表現の基底に潜在する意味に注目すべきであ
り、表現の装いに幻惑せられてはならない。浮舟が薫に引取られる
という説は、一部の表現に幻惑させられたか、初から成心を持った
めかである。手習・夢浮橋二巻に描かれている浮舟の志操心境は、
終末の場でやや動揺したさまに描かれた外は、はっきりしており、
浮舟はみずからの力でみずから救わうとしている。要するに、手
習・夢浮橋の二巻は浮舟の救済が主題であり、終末の場の波瀾に
は、罪の償いに生涯を捧げようとする悲壯な決意が、それを妨げる
外的事象に出会って、困惑と苦痛を味わいながらも、女性らしい優
婉柔軟な善措の底に、それを護持しようとして抵抗する姿が描かれ
ている。思うに、浮舟ほど深く罪を悔いる心は、当時の宮廷貴族の
弛緩した風儀の中からは生れにくいであろう。密通した藤壺・女三

源氏物語終末の救済について

宮にも、浮舟ほどの罪の意識はなく、臘月夜のように皇妃でありな
がら、源氏に心を通わしても、本人はあまり良心に責められてはい
ない。浮舟の歩んだ道は、東国の田舎で育った素朴純情の女の歩む
道であり、澁んだ風儀に汚染されない、心の清らかな女の歩む道で
ある。

補 註

(一)名前をあげてその説を紹介批評したもの

多屋頼俊「源氏物語の思想」(三七年四月)の「宇治十帖の結末・

追記」

丸山キヨ子「源氏物語における仏教的要素・横川の僧都について」

(日本文学・三八年一〇月号)

小野村洋子「源氏物語における宿世の深化」(兄弟・三九年四・

五・六・七月号) 小野村氏の論文の目的は、源氏物語におけ

る人間的愛(あはれ)と、宿世とのからみ合ふ精神構造を考え
て、救済の道を究明するにあるが、そのことはこの論文の直接
の目的でもなく、またそれを考察する余祐もない。ここではそ
の論文の中、横川の僧都と浮舟との救済に関連する部分だけに
注目した。それで小野村氏の論文の根本を取扱わないから、失
礼なことになりはしないかと、恐れている。

門前真一「源氏物語新見」(四〇年三月)の「宇治十帖の構成と

浮舟の還俗問題」

(二)その他参考となるもの

小野村洋子「源氏物語の宗教的内面化」(文化・二五年七月号)

淵江文也「源氏物語の思想攷説」(三〇年三月)の「源語の思弁性

の研究」

村田昇「中世文芸と仏教」(三二年五月)の「女性と仏教・女人
解放」

村田昇「日本古典の仏教的精神」(三三年二月)の「源氏物語
の論・浮舟」